原発事故20年 チェルノブイリに暮らす

「働いて、働いて、ここまでにした家。放射能なんて何ともない」

住み慣れた故郷 疎開を拒み孫と2人

チェルノブイリ原発事故が起きる二十年前まで、二百五十世帯が暮らしていた村は、十九世帯だけになっていた。ベラルーシ南東部のグバレービッチ村。深刻な放射能汚染のため、今も避難勧告が出されているが、移住を拒んだり、勝手に空き家に住み着いたりした人びとが暮らしている。その一人、七十二歳になるナージャおばあさんの家に同居して、人々の生活ぶりや事故への思いを探った＝文中敬称略。（滝川裕樹、写真も）

「何て酒の飲み方だい。一気に三杯飲み干すんだよ。健康のため、家族のため、あとは、われらが大統領のためにね」

チェルノブイリ原発から約五十キロ北にあるベラルーシのグバレービッチ村。その一軒、ナージャ・ゾーラの自宅に、しばらく滞在させてもらえることになった。宴を開いて歓迎してくれたナージャはウオツカを手に上機嫌だった。

■キノコ採取禁止

目がくらむようなきつい酒。ようやくグラスを空けると、ほおにキスしてくれた。大きな口を開けて笑う。とにかく陽気だ。

「本当に日本人が泊まりに来るのか心配でね。眠れなかったよ」。そう言うと、また、なみなみと酒を注ぐ。「放射能なんて何ともない。ウオツカさえ飲んでいれば、大丈夫さ」

テーブルには、食べきれないほど、たくさんの料理が並ぶ。ふかしたジャガイモ、キュウリ、トマトの酢漬け、キノコと豚肉のいためもの。裏の畑で何でも採れる、と胸を張る。

国中が森に覆われたベラルーシでは、多くのキノコが採れる。スープやサラダなど料理法も多彩だ。ただ、放射性物質が蓄積されるので、汚染地域での採取は禁じられている。

「キノコは畑で採れませんよね」

「隣町で買ったのさ。森で採ったりしないよ、私はね」。やけに「私」を強調する。村には、森のキノコをドイツなどへ売り払う連中もいたからだ、という。

■事故前は250世帯

原発事故の前、村には二百五十世帯が暮らしていた。二十年前の「あの日」、近くの幹線道を数多くのトラックやバスが原発のある南へと走り去って行った。数日後、真っ白い服を着た男たちが、村中の家や道路を洗い流した。村人が疎開を命じられたのは、さらに後のことだ。

ナージャは事故の翌年、夫を肺がんで亡くした。「ミーシャ（亡夫）は、ヘビースモーカーだった。放射能汚染のせいじゃない」。事故の影響を問う前に首を振る。「たばこのせいさ」と何度も繰り返す。それでも、「夫の死が事故の補償対象になるか、国に申請したよ。だめだったがね」。そう言って、大笑いする。

事故後、政府から近くの街ホイニキにアパートを与えられた。だが、住み慣れた故郷を離れられず、移住を拒否した。同様に居残った村人もいたが、一人、また一人と故郷を後にした。

「隣に住んでた女性は、移住先で『チェルノブイリから来た新参者』と言われてね。病気で死んでしまったよ。私はどうだい、こんなに元気だよ」。興奮してまくし立てる。「はい、はい」と相づちを打つ。

疎開を拒んだり、街から舞い戻ったりして、汚染の街や村に住み続ける人を「サマショール」と呼ぶ。ナージャの家を訪れるまで、こうした人たちの家は、柱が傾いた廃屋を想像していた。ところが、ナージャの家は実に立派だ。台所のほか、部屋が六つもある。

家畜小屋や、野菜の貯蔵庫…。車はないものの、ガレージまである。ガスはプロパンだが、電気、電話も通じる。きれい好きのナージャが、こまめに掃除しているからなのか、屋内は清潔感に満ちている。

「いい家ですね」。そう言うと、「そうだろう、何日でも泊まっておくれよ」と顔をくしゃくしゃにして喜ぶ。「働いて、働いて。家をここまでにしたよ」。手を握ると、彼女の指はとても太かった。戦争や原発事故、旧ソ連崩壊による混乱の中、故郷で力仕事や畑を耕しながら生き抜いてきた手だ。

■隣村に徒歩通学

ナージャは、十五歳になる孫のセルゲイと暮らす。父親は村内に住むナージャの三男。同じ名前のセルゲイ(33)だ。宴が終わるころ、孫のセルゲイが帰宅してきた。数キロ離れた隣村の学校まで歩いて通っている。ナージャがすぐに用事を言い付けた。家全体にめぐらされたパイプに湯を通して暖めるペチカ（暖炉）にまきをくべ、家畜に餌をやる。結構忙しい。一段落したところ、散歩に誘ってみた。

薄気味が悪い廃屋が目立つ。「ここは七年前まで商店だった。買い物に来たのを覚えているよ」。隣は文化会館跡。事故前は村の若者がダンスやスポーツを楽しんだという。独ソ戦の戦勝記念碑にはセルゲイの曾祖父の名が刻まれていた。

そんな村が静かで、好きだという。性格なのかもしれないが、若いのにやけに落ち着いている。

帰宅すると、セルゲイの父と妻のタチアナ(35)が来ていた。妊娠中のタチアナは、生まれてくる子どもをこの村で育てるという。いまは近くの製乳工場で働いている。

父のセルゲイは、首都ミンスクの包装工場で働いていたという。「ロシア各地に出張に行った」と胸を張る。ところが、いまの職業を聞いてもはっきりしない。昔話ばかりしている。しびれを切らしたタチアナが「主夫なんでしょ」。そう言った後は、黙って紅茶をすすっていた。

父は事故後、ミンスクに出て結婚した。男の子が生まれる。だが、結婚生活はすぐに破たんし、ナージャが当時六歳の孫を引き取った。その父は昨年、再婚したタチアナと帰郷し、空き家に住み着いた。タチアナに遠慮しているのかどうか、息子とは別居している。

それでも、毎日、ナージャの家にやって来る。朝から酒くさい日もある。会うといつも、「OK」の意味を込めて、あいさつのウインクをしてみせる。ひょうひょうとしていて、どこか憎めない。

■「この村が好き」

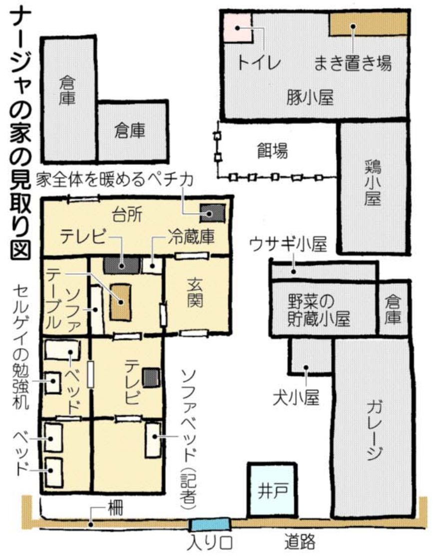
汚染地の村に雪が降る。暦は四月になろうとしていた。庭からまた、ナージャの大声がする。「おばあさんは元気だねえ」。セルゲイに耳打ちすると、「貨車の重い荷物を下ろしたり、騒々しい現場で働いてきたから」と大人びた言葉が返ってくる。「おばあさんを大切にね」。声を掛けると、黙ってうなずいた。

前の日、ナージャは豚を一頭売った。日本円で約三万円だ。「セルゲイにパソコンを買ってやりたくてね。あといくらあればいいかい」。真剣な表情で聞かれた。残る二頭を売り払っても足りないかもしれない。はっきりは言えなかった。

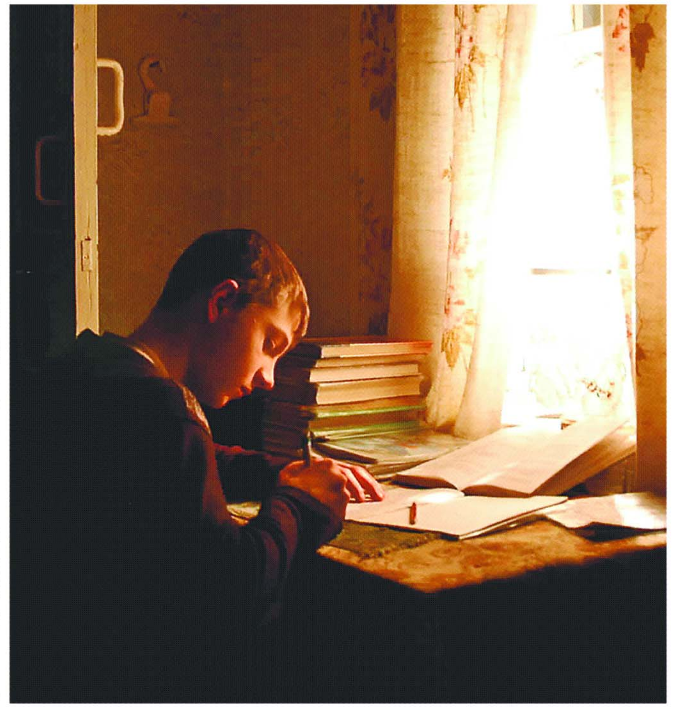
その夜、宿題をしているセルゲイに「取材は迷惑ではなかったかい」と尋ねてみた。「楽しみにしていたよ」と笑ってくれた。それから、兵役を終えるまで恋人はいらないと思っていることや、酒は大人になっても飲まないと決めていることなど、いろんな話をしてくれた。

最後まで、放射能汚染の村から出たくはないのかと、聞けなかった。この村が好きだというセルゲイを前に、ためらってしまった。どこか村を出るあてがあると思えない。部屋の裏手から、仲間を失った豚の鳴き声が聞こえてきた。

「日本人が来てくれるなんて。何日でも泊まっていっておくれよ」。裏の畑で採れた作物の料理で歓迎の宴を開いてくれたナージャおばあさん



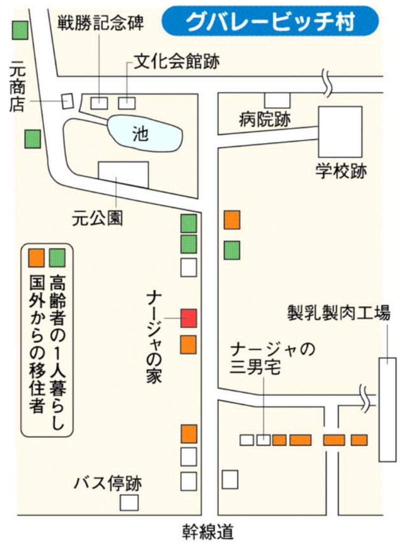
ナージャの家の見取り図



薄明かりの下で宿題をするナージャおばあさんの孫セルゲイ。物理が得意だという

無数の廃墟がたたずみ、ゴーストタウンの様相を見せるグバレービッチ村。ベラルーシ南部には、放射能汚染が深刻な村が多数存在する

グバレービッチ村 全19世帯



独居や移住者目立つ

ナージャの孫セルゲイに案内を頼んで、住民の大半が避難したグバレービッチ村に住んでいる全十九世帯を調査した。

こぢんまりとした村は、端から端まで、一・五キロほど。中心部に近い池の周りに、かつては公園や文化施設、商店が集まっていたという。低学年までの学校や、幼稚園、病院もあった。

お年寄りの一人暮らしが、全十九世帯のうち五世帯を占める。ほとんどが事故後、疎開を拒んで村にとどまった。

幹線道近くの空き家には、旧ソ連の各共和国や国内から流れついた人たちが暮らす。他の共和国から来たのは七世帯に上り、うち中央アジアのカザフスタン人が四世帯と最も多い。ロシアとウクライナ、タジキスタンが一世帯ずついる。

ベラルーシ人では、ナージャの三男セルゲイのように、事故後いったん疎開したものの、街の暮らしになじめず、舞い戻った人もいる。このほか、どんな事情で村に住み続けるのか、分からない世帯もあった。

国も居住を黙認

ワシリー(25)と、エレーナ(30)と名乗る夫妻は当初、首都ミンスク北東にあるロシア国境に近い街ビテブスクから職を求めて移住してきたと話していた。「行政から空き家を勧められた」と説明した。

だが、後日、ホイニキ地区執行委員会の担当者に聞くと、「居住を認めていない村に、部屋を仲介するわけがない」と否定した。夫のワシリーが村の出身者だったことや、定職がないらしいことはその後、分かった。

行政も「サマショール」の全容把握は難しいようだ。地区執行委員会は村の世帯数を、おおざっぱに十五－二十七世帯と説明していた。職員の一人は「村に子どもは住んでいないはずだ」と話していたが、実際には幼児のいる世帯があった。

国は、放射性物質のセシウム137の濃度が一平方㍍当たり三十七キロベクレル（以前の単位で一平方キロ当たり一キュリー）以上を「汚染地域」と定めている。村では今でも一平方㍍当たり五百五十五－千四百八十キロベクレルを記録する。この村の汚染の高さが分かる。

原発から半径三十キロ圏内など放射性物質の濃度が一平方㍍当たり千四百八十キロベクレルの基準を超す汚染地域について、国は数年前に住民の強制的な移住を終えたとしている。しかし、グバレービッチ村のような基準以下の高汚染地域では、居住を黙認しているのが実情だ。

ベラルーシ 深刻な汚染地域

社会基盤立て直し課題

嫁ぎ先のウクライナから移住してきた女性。汚染された牛乳を子どもに飲ませることに「ときどき不安を感じるが、しょうがないでしょ」と話す

深刻な放射能汚染に見舞われたベラルーシでは、チェルノブイリ原発に近い南部ゴメリ州など、汚染地域の社会基盤の立て直しが重い課題になっている。

原発から約五十キロ離れたゴメリ州ホイニキ地区。事故前の人口約五万人が、現在は約二万四千人に半減した。立ち入りが厳しく制限される高汚染地域の面積は、地区の45％にも上る。

地区執行委員会議長のニコライ・サフチェンコは「四百年以上、人が住めない激しい汚染地域もある。半減期（放射線の強さが半分になるまでの期間）が二万年を超す放射性物質プルトニウムのホットスポット（高度な汚染地点）も少なくない」と顔をしかめる。

放射線に対する感受性が高い十四歳以下の子どもは地区全体で四分の一の約六千人。地区で採れた牛乳を与えないなど、食物を通じて放射性物質を体内に吸収しないような対策に力を入れている、と説明した。

ホイニキをはじめ、ゴメリ州の南部では事故後、教師や医師らが地域から逃げ出し、社会問題になった。国は、教師と医師の給料を二倍にし、アパートを支給するなどの厚遇で人材を確保している。だが、農業部門の技術者不足は今なお深刻で、解決のめどは立っていないという。

汚染地域には、旧ソ連の各共和国から流入した移住者も目立つ。連邦が崩壊した後に起きた民族紛争や内戦、貧困から逃れた人たちだ。ベラルーシでは、七年間住めば国籍が与えられる。汚染地域の労働力不足も手伝い、集団農場で働く場合には、こうした移住者に住居を提供して迎え入れている実情もある。

移住者流入の背景には、ナショナリズムが希薄といわれる国民性がある、とも指摘される。ベラルーシでは独立後、他の共和国のように、他の民族を排斥しようとする目立った動きはない。